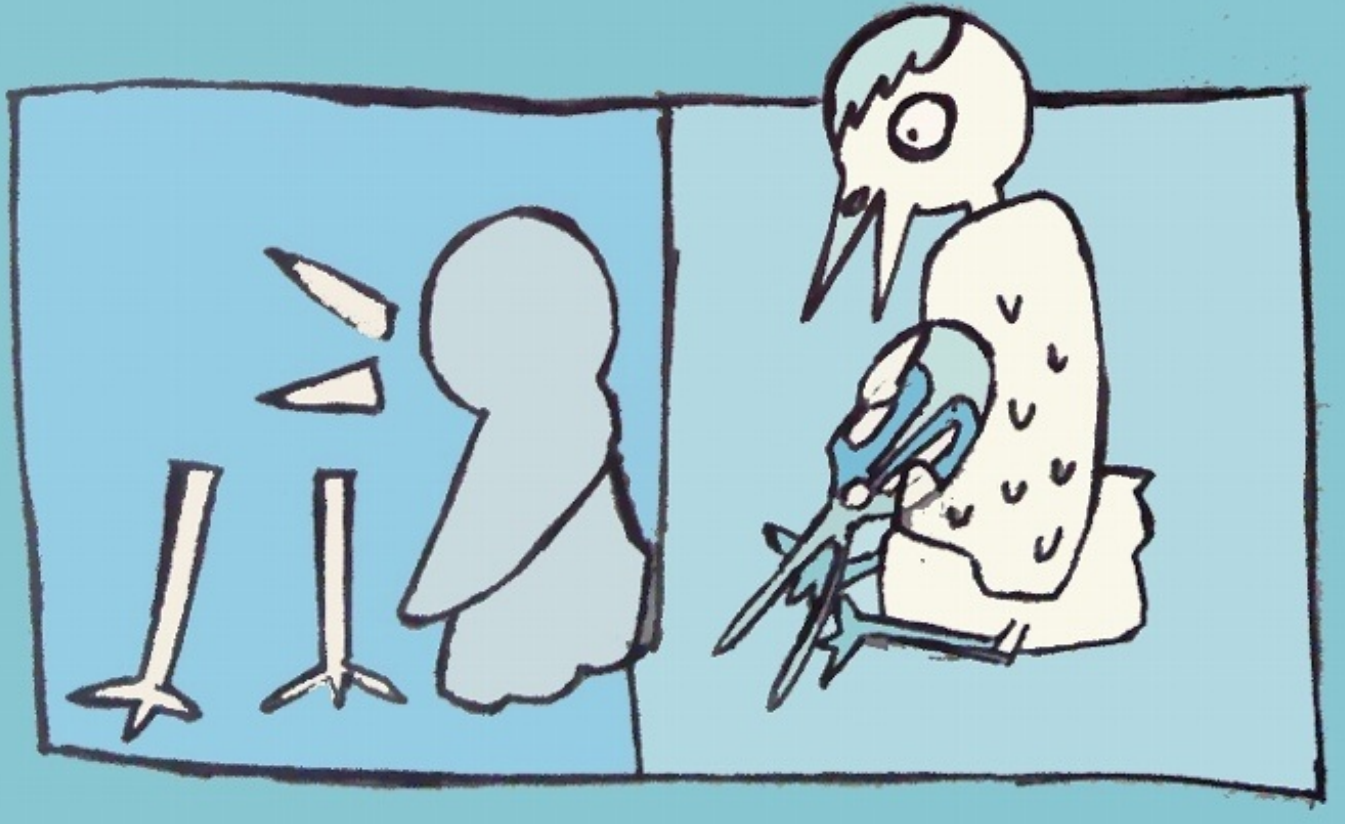
はじめての友達

みさと（著）



はじめての友達

みさと

ある朝方の街、とある一本の木に、赤茶色したカラスがとまっていました。名前はありさといいました。人間にたとえると、小学一年生かの少女でした。

その木の近くには、大きな白い建物がたっていました。製紙工場といって、紙を作っている会社でした。

ちりとりと、ほうきをもったおじさんが、ねっしんに、その会社の階段をはいています。

カー、カー、おじさんは鳴いているありさに気がついて、しばらくそのようすを目を細めてみていました。そして、掃除のつづきを少ししたあと、建物の中に入ってしまいました。またありさは、ぼーと空を見ていました。

しばらくしました。またあの掃除のおじさんが、外へ出てきました。彼は黄色に染められた紙を一枚、もってきました。きれいなも

のが好きなありさは、またたくまにその紙に興味をもちました。ほしくてほしくてたまりません。下に降りて、おじさんのあとにちょんちょんとついていきます。

おじさんは、そのきれいな黄色い紙を、今からゴミ捨て場にもっていこうとしていたところでした。ふりかえってみて、カラスがついてきたので、どうしようかとすこし考えました。

「カラスや、カラス、この紙が欲しいのか？これは少し汚れているよ、売り物にならないから私は今から捨てに行く。だけども、欲しかったらあげるよ、いるかい？」

ありさは、うれしそうにカーと鳴きました。

「ほしいほしい、くださいな。」

と言っているのです。

おじさんは、ありさのくちばしに紙をはさめるようにさしだしました。ありさは、そのまま飛んでいきました。自分の巣までほんの

七分です。すこしひらけた丘にたつ、桜の木のうろのなかです。ここでいつも眠ったり、目を覚ましたりしていました。ありさは、ここが世界一すごしやすい、おちつくところだと、いつも自慢に思っていました。

さて、ありさは、りっぱな黄色い紙を部屋に広げました。部屋の中がぱっと明るくなり、それはそれはすばらしく美しく光りました。ありさはしばらく悩みました。このまま、じゅうたんとして床に敷いておくのもいいでしょう。しかし、このまえハサミを買いました。このハサミでやっぱりなにか切ってみましょうか。

ありさは、悩んだあげく、一羽のカラスをきりぬくことにしました。ありさはなかのよい友達がほしいのでした。一緒に飛べたらすてきでした。

頭と体をきりぬいたあと、足がうまくきりぬけませんでした。細い足をつなげてきりぬくには、ちょっとありさにはむずかしいようです。ありさは、そこで胴体と足とをきりはなし、足は足だけで、二本作りました。

のりをつけてくっつかせると、そのつぎめがめだたなくなりました。ありさはほっとしました。そしてついでにくちばしもはりつけました。なにかおしゃべりでもしてくれるような、半びらきの状態でくっつけました。

かんにさしたペンをぬきとり、それでぐりぐりとかわいい目をかきました。これで完成でした。ありさは、満足して、小さなため息をつきました。

するると突然、紙のカラスが

「やあ、」

といいました。

夢かな、たったまま眠ったのかな、ありさ

は目をぱちぱちとしばたかせました。

「やあ、」

もう一度、紙のカラスは言いました。

「やあやあ、いやびっくり。もしかしてほんとうにしゃべっているのかい？」

「ああそうだとも、ちゃんと立つこともできるさ。ほら。」

黄色いカラスは、ぽんと立ちました。

「一緒に空を飛ばないか、僕は一応カラスなんだから。」

「そうだね、そうだね、飛びに行こう。どっちが早いかな、競争だ。」

ありさは、ぽんと外に出かけました。でもふりかえると、黄色いカラスが床に手をついてびっくりとしています。

「どうしたの？」

「わからない、足がうまく動かないんだ。」

みると、よくのりが乾いておらず、ぬれた

ところがはずれかかっています。

「すこし乾かそう。そこで寝ていなさい。わたしは、外に出て花つみに行ってくるから。」

ありさは、ぽんと桜のうろから出ると、ぽかぽかとする太陽の下で、はねながら小さな花をつぎつぎと見ていきました。

そのあいだ、黄色いカラスは、眠くもないのに、横になっていないといけませんでした。つまらないので、そのつまらないままの瞳で、じっと、うろから見える景色を見ていました。

しばらくたってのことです。ありさが花をつんで帰ってきました。

紫やら青やらの小花がたくさんでした。

「どう、ようすは？立てるようになったかい？」

ありさがたずねると、黄色いカラスはおそるおそるたってみます。うまく立てました。

ありさは、つんできた花を花びんにさして、

それをみたてのよい場所に置きました。

外に出たありさと黄色いカラスは、しばらくはねたり、飛んだりして遊びました。

黄色いカラスは、紙なのに、ちゃんと飛べました。

五時のサイレンがなった頃、ぽつぽつと雨がふりはじめました。

わあ、たいへんだ。早くうろの中へ入らなきゃ。ありさは、先に自分の家につきました。ふりかえると、黄色いカラスはついてきていません。うろのはしをぐっとつかんで外を見ると、黄色いカラスが、くしゃりとなって草原に落ちているのが見えました。

ありさは、あわてて自分の頭をつばさでかばいながら、黄色いカラスのもとへかけよりました。顔も体もぐしゃぐしゃでした。しか

し、ふしぎと紙がしっかりしているためか、水にとかした豆腐のようにはなっていませんでした。

黄色いカラスをうちにつれて帰ると、ありさは、奥からストーブを出してきました。マッチをしゅっとこすると、灯油がしみたしんに火がうつりました。やがて部屋はあたたかくなりました。五月でしたから、もう寒くないだろうと、ストーブはしまっていたのですが、つけずにいたら、きっとありさも黄色いカラスも、風邪をひいたことでしょう。

黄色いカラスは、やがてからからに乾きました。乾きすぎて、まえより紙のしつがごつくなりました。しかし、色だけは、みじめにうすくなっていました。それでも紙のカラスは、ああ元気になったとのびをしました。

次の日の朝です。紙のカラスは、一番に起きて、ありさに大声で言いました。

「見ろよありさ、僕、目がすごいよくなったみたい。遠くの店のこまごましたかざりもはっきり見えるよ。」

ありさは、目がうつろでしたが、あくびをかみころしてぼやける黄色いカラスを見ました。でも、まだほんとうに疲れていたので、すぐに眠ってしまいました。

しばらくして、ありさがかんぺきに目を覚ましました。黄色いカラスが外に出たいとせかすので、一緒に街まで行きました。ありさは、近くに行ってようやく気がついたことがありました。

そこは雑貨屋さんの前だったのですが、どうやら、黄色いカラスのおめあては、あのシ

ショーウィンドウにかざってあるクレヨンにちがいありませんでした。きっとそれがほしいにきまっていました。

体のことをちっとも言いませんでしたが、きっと自分が一番、ひどい羽の色をしていると気になっていたのでしょう。

ありさは、

「よし、買いにいこう。」

と元気な声で言うと、黄色いカラスの肩を、がっしりと自分の羽でおおいました。

店の中に入って、

「すみません、ショーウィンドーのクレヨンが欲しいのですが。」

とありさがたのむと、店の人がショーウィンドーの鍵を開けました。はいどうぞ。ありさはそれを受け取ろうとしました。ところが・・・・。

それをさっと、誰かがうばいとりました。

それは、とても大きな銀色のカラスでした。銀色のカラスは、何も言わずにそれをレジにもっていき、小銭をたたきつけて、さっそうと店を出ていきました。

ありさと黄色いカラスは、なにがなんだかさっぱりわけがわかりません。いったいなんだったのでしょう。お店の人に黄色いカラスが言いました。

「あの、他にはクレヨン置いてないんですか？」

「申し訳ございません。クレヨンはあれが最後でした。ただいま在庫切れです。」

「そうですか。」

ありさと、黄色いカラスは、しょんぼりと肩を落としました。

店を出ると、銀色のカラスが、のたのたとおくを歩いているのが見えました。

「よし、おいかけよう。雑貨屋さんはこの街にここしかないんだもの、それなのに最後のひとつをうばっちまうなんてあんまりだ。行って交渉してみよう。」

ありさはいさましく言うと、それといって銀色のカラスのあとを追いかけました。黄色いカラスもうんと言ってついていきました。

銀色のカラスは、つたがよくまきついているとても古い梅の木に住んでいました。銀色のカラスはさきほど買い取ったクレヨンをぽいと自分のうろの中にしまいました。うろの中には、まだまだたくさんの使われていないクレヨンが山のようにつまれていました。クレヨンのコレクションでもしているのか、そ

れともクレヨンの値上がりを期待しているのか、それは、ありさたちにもわかりませんでしたが、とにかく、そんなにあるのだったら、ひとつくらいゆずってくれてもいいものだと思いました。

「おじさん、わたしたちにクレヨンひと箱ゆずってください。色が欲しいんです。」

ありさは梅の木の枝にとびうつると、カーと鳴きました。

「ごめんだね、あたしゃ、みんながそうやって悲しんでいるところを見るのが好きなんだ。ああ、とっても快感だ。」

ありさも、木の下でまっている黄色いカラスもこまった顔をしました。これはひとすじなわではいかないカラスです。

紙ガラスが布で、できているのなら、草木でも染められたであろうに。くやしいですが、そのクレヨンはどうしても手にいれなくては

いけません。このままでは、黄色いカラスがかわいそうです。

「お願いです。ひと箱じゃなくてもいいんです。黄色だけでもください。」

ありさは、クレヨンの箱をあけて黄色だけをとっていいました。それをやめろやめろと、ひっぱりあっているうちに、クレヨンはぽきっと折れました。そして、そのいきおいでありさは、折れたクレヨンとともに、地面にたたきつけられました。ああ、痛い。

「ああ、もう、それは使い物にならないな、もういい、それだけもっていけ、金はちゃんと置いとけよ。」

そういって、銀色のカラスは梅の木のうろのとびらをきちんとしめてしまいました。

しんとした野原に、たたきつけられたありさはしばらく動きませんでした。ありさを心配している黄色いカラスは、動揺をかくせません。でも、ありさは、別に首の骨をおって、死んでいるわけでも、気を失っているわけでもありませんでした。ただ、ただ、ほんとうにくやしくって、たまりませんでした。

でも、ありさは、ゆっくりと立つと、羽についた砂をはらいました。そして、

「さあ、うちに帰ろうか。」

と、黄色いカラスにわらって言いました。

うちにつくと、さっそくありさの色塗りがはじまりました。色がぬけている黄色いカラスを横に寝かすと、その上にぐりぐりとクレヨンを押しつけ、色を塗りつけていきます。

黄色いあざやかな色がすぐに体にしみわた

ります。

はじめはくすぐったいと思っていた黄色いカラスでしたが、だんだんに痛みがはしってきました。目の中にも、開けたままの口の中にもクレヨンが入ってしまい、黄色いカラスの世界が、いっしゅんにして暗闇になりました。怖くなった黄色いカラスは、ありさにこう言いました。

「僕、いる？この世にいる？ありさちゃんはいる？そばにいる？」

ありさはおだやかにわらうと、

「心配しなくても大丈夫、ちゃんと最後には目をかいてあげるから、それに、口の中に入ってしまったクレヨンもきれいにふきとってあげるから。」

「うん、そっか。」

黄色いカラスは、安心したので、はげしい痛みにも、ぐっとたえました。

それからしばらくして、黄色いカラスは、なんだか自分がつるつるしているような気分になってきました。

「ありさちゃん、僕、今、どんな姿になっているの？教えて。」

かちゃん、と音がします。

ありさが黒いペンをとったときに、缶をこすって、出た音でした。

「今？今はキーちゃん、のっぺらぼうだよ。」

「のっぺらぼう？」

黄色いカラスは、絶望的で、頭の中がまっしろになりました。

ありさは、おびえてしまった黄色いカラスの顔に目をかいてあげました。口も、はみでたクレヨンをきれいにふいてあげました。

黄色いカラスは、ようやくまぶたの上に、

光を感じました。おそるおそる、目を開けてみました。ぼんやりと、そしてしだいにはっきりと、色のある世界が見えました。自分を見ているありさの顔も、はっきり見えました。

「どお？見える？」

ありさは、心配しました。

「うん、見える。ちゃんと見える。」

黄色いカラスは、ありさを抱きしめました。そして、とても喜んで、何度も、見える見えると、言いました。

はじめての友達

http://p.booklog.jp/book/71029

著者：misato77
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/misato77/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/71029

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/71029

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ